

啓 蒙思想と産業革命の技術革新から生まれた近代は、繁栄だけでなく公正な社会の到来を約束した。少なくともヨーロッパでは君主や貴族、教会の絶対的な権威が否定され、旧来の思想信条は台頭する合理的思考や科学的思考に取って代わられた。また技術革新はさまざまな職業に機械化をもたらし、新たな産業が生まれ、富が増加し、働く人々の生活も改善されるという希望が生まれた。

階級意識

しかし、現実の近代的な工業社会はユートピアとは程遠かった。19世紀と

もなれば少なからぬ人々が、この進歩に伴う代償は重く、そのバラ色の約束の多くは果たされないことに気づいた。公正・公平な社会どころか、近代社会は新たな不平等を生み出していた。こうした現実を研究した先駆者の一人が、工場で搾取される労働者に注目したフリードリッヒ・エンゲルスだ。エンゲルスはカール・マルクスとともに、資本家ばかりが調う資本主義が労働者を抑圧していると論じた。

マルクスとエンゲルスは、近代社会の抱える問題を物質的・経済的側面から捉え、労働者階級（プロレタリアート）と資本家階級（ブルジョアジー）の分断が不平等の元凶だと見なした。

その後の社会学者たちは階級間の不平等を認めつつも、階級（階層）は経済的なものだけではないと考えた。たとえばマックス・ウェーバーは、経済力に加えて社会的地位や政治的立場による階層化も想定した。階級の問題と階級意識の問題は、その後も社会的不平等に関する研究で重要な位置を占め、ビエール・ブルデュアの「ハビトゥス」のような概念をもたらし。

人種・民族による差別と抑圧

エンゲルスとマルクスは階級間の経済的な格差に焦点を絞ったが、社会の不公正に苦しむのは労働者階級だけでなく気づく社会学者もいた。

たとえばハリエット・マルティノーは、権利の平等という啓蒙主義の理想と近代社会の現実のギャップを指摘した。彼女はアメリカを旅して奴隷制度の現実を目の当たりにし、自由を大事にする民主主義の下でも女性や少数民族、労働者などが社会の本流から排除されている現実を告発した。こうした複雑な差別・抑圧の構図には後のベル・フックスも言及している。やがて奴隷制は廃止されたが、真の解放は訪れなかった。20世紀に入っても、アメリカは黒人に選挙権を与えず、政治から排除し続けた。黒人制と植民地主義の落とし子である黒人差別は、アメリカだけでなくヨーロッパ

にも根強く残り、今日に至っている。W・E・B・デュボイスをはじめとする社会学者はヨーロッパ系白人の牛耳る欧米先進諸国における民族集団の地位を考察し、とくに人種と社会的不平等の関係に注目した。その流れは、黒人とゲットー（隔離された貧民街）の関係を研究したイライジャ・アンダーソン、西洋による歪んだ「東洋」観を分析したエドワード・サイード、近代の多文化社会においていかに人種差別を撲滅するかを探求したボール・ギルロイらに受け継がれている。

ジェンダーの平等を求めて

女性もまた苦難の末に参政権を得

たが、家父長制的な社会において今もさまざまな差別を受けている。「第1波」のフェミニズムは100年以上かけて女性参政権の獲得に成功したが、第二次世界大戦後の第2波フェミニズムはジェンダーにもとづく差別・不正が現代社会に深く根を張っている事実を暴き、その克服の道を探ってきた。シルヴィア・ウォルビーは、女性を抑圧している経済的・政治的な要因を単に追究するのではなく、社会の家父長制的構造を維持している社会制度の包括的分析を試みた。一方、R・W・コンネルは「男らしさ」に関する固定観念や社会的規範が家父長制的社会を強化していると論じた。■



近代世界システム イマヌエル・ウォーラーステイン (1930年～)

背景知識

テマ
世界システム論

歴史に学ぶ

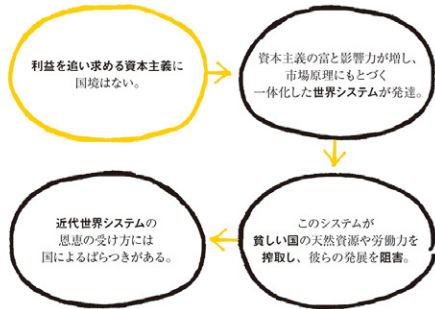
16世紀 欧州列強がアメリカ大陸やアジアの一部地域を「発見」し、植民地化したことで、グローバル資本主義の基礎が築かれた。

1750年 イギリスで産業革命が始動。

1815～1914年 新産業や、社会・経済改革が欧米と日本、そしてオーストラリアなどに広がった。これらの地域の国々が近代経済システムの「中核」をなした。

1867年 カール・マルクスが資本主義の搾取の構図に焦点を当てた『資本論』第1巻を出版。

20世紀以降 グローバル貿易が旧植民地などをグローバル資本主義の「システム」に統合しながら発展。



世界中の国々が相互につながっている世界経済システムでは、先進国が開発途上国の天然資源や労働力を搾取している。アメリカの社会学者イマヌエル・ウォーラーステインは「近代世界システム」(1974年)で、そう指摘した。この「世界システム」は、貧しい国の発展を阻害し、富める国が世界中の天

然資源や商品や富をほぼ独占し続けられるようにできている。

ウォーラーステインによれば、世界経済システムが姿を現したのは16世紀のこと。イギリスやスペイン、フランスなどが植民地の資源を搾取したことに始まる。こうした不平等な交易関係によって(余剰が生まれて)資本は蓄積され、経済システムの拡大のため

参照 カール・マルクス 28-31 ■ ローランド・ロバートソン 146-47 ■ サスキア・サッセン 164-65 ■ アルジュン・アパデュライ 166-69 ■ デヴィッド・ヘルド 170-71

に再投資された。19世紀後半までには、世界の大半の地域がこの商品生産・交換システムに組み込まれた。

国際舞台

近代資本主義の起源に関するウォーラーステインの理論は、カール・マルクスの理論の舞台を世界に移したものだ。マルクスは資本主義をもたらす「剰余価値」をめぐる闘争に焦点を当てた。労働者は賃金以上の価値を生み出すが、この剰余価値は雇い主の利益になる。労働者階級が生み出した剰余価値は(本人の手には渡らず)裕福なエリート層にもっていかれてしまう。

この構図を、ウォーラーステインは世界に当てはめ、商品の生産・流通システムの受益者に焦点を当てた。世界システムにも国々々の間に、国内でいう階級のようなグループが存在する。彼らはそれぞれのグループを「中核国」「準

近代世界システムは国家間の不平等な経済・交易関係の上に成り立っている。それは、あたかも国内でいう階級システムのようなものだ。

■「**周辺国**」の経済基盤は農業・鉱業に限られ、弱い立場に置かれている。準周辺国と中核国に農産物や原材料などの一次産品や安い労働力を提供する。

■「**準周辺国**」は豊かさにおいても社会・経済的な状況においても周辺国と中核国の間に位置する。

■「**中核国**」は先進工業国で豊か。近代世界システムの中心となって支配する。



周辺国」「周辺国」と名づけた。中核国を構成するのは先進国で、高度な技術が必要な複雑な製品を生産する。中核国は天然資源や農産物、安い労働力を周辺国から調達する。準周辺国は両者の中間に位置する。

中核国と周辺国との間には不平等な交易関係が存在する。(国際的な分業体制の下)中核国は周辺国よりも高度

な商品をより高く売り、余剰を手に入れる。準周辺国は周辺国との不平等な交易から利益を得る一方、中核国との間では不利な立場に置かれる。

この世界システムは比較的安定しており、簡単にには変わらない。グループ内で国の立ち位置が変わる可能性はあるが、準周辺国が中核国に昇格したいと望んでも、中核国には軍事的と経済力があるため、世界全体が平等な関係に再編成される可能性は低い。

ウォーラーステインの近代世界システム論が確立したのは1970年代。グローバル化という言葉が一般化するより前のことだ。社会学は1980年代末から1990年代初頭になってようやくグローバル化を重要なテーマとして扱うようになった。そのもう一人ウォーラーステインは、経済のグローバル化やその社会政治的な影響について早い時期から取り組み、しかも多大な貢献があったと評価されている。■

富と不平等のグローバルな構図

かつて社会学者たちは国家間の不平等を論じるときに「第一世界」(先進欧米諸国)、「第二世界」(共産主義工業国)、「第三世界」(旧植民地)という言葉を使っていた。国家は資本主義や工業化や都市化の進み具合でランク付けされ、貧しい国が貧困から抜け出すためには先進国の経済的な特徴を備える必要があるというような議論がなされていた。

こうした第三世界の国々は単に開発が

遅れているだけという考えを、ウォーラーステインは否定。グローバル経済を支える経済的プロセスや関係を焦点を当てた。そして、確かに当初は、世界システムにおける国家の立ち位置は歴史的・地理的条件の産物だったかもしれないが、中核国と周辺国の格差を拡大し、不平等な関係を固定化したのはグローバル資本主義の市場原理であると主張した。